

女子大学生における食生活調査（第1報）

——食品群の嗜好性と知識・興味の関係について——

○伊 海 公 子（大阪樟蔭女大） 家 本 修（梅花短大）

目 的：飽食の時代といわれるが、若い女性の間には必要以上に「スマートでいたい」という風潮が認められ、極端な場合、日常生活や健康状態、精神衛生状態などに支障をきたすといった報告を耳にする。そこで、食生活の状況と生活一般との関係から食生活傾向特性への影響を明らかにしたいと考える。本報では、若い女性達の一般的な食品群に対する「好き・嫌い」の傾向とその頻度から、その特徴を捕らえることを目的としている。

調査方法：調査は、質問紙法による集合宿題調査で、昭和62年12月～昭和63年1月、大阪樟蔭女子大学在学学生453名に配布し、1週間後に回収を行なった。有効回収率は、58.5%(265件)であった。調査項目は、1)身体状況・生活全般について、2)食生活についての2項目であった。食生活項目の中で、17種類の食品群を記載し特に好きな群・嫌いな群があればそれぞれについて最高3個までを回答してもらった。

結果・考察：1)嫌いな食品群は、「なし」26件、「1」88件、「2」49件、「3」61件であった。2)好きな食品群の代表は、果物類であり、次に穀類、野菜類、獣肉類であった。また、嫌いな食品群は魚類、豆類、魚製品類であり、食品群の洋風化嗜好が顕著であった。3)食品群相互の関係では、大豆製品類を「嫌い」と答えた32件の半数が豆類も「嫌い」($\phi=0.326$)であり、また、獣肉製品類を「嫌い」とする24件の内9件が魚肉製品も「嫌い」($\phi=0.216$)と答えており、それらは因子分析の結果、同じFACTORに分類された。一方、Eビ・カ類を好む群は同時に好む食品群が多く、果物類($\phi=0.266$)、乳製品類($\phi=0.204$)、イカ・タコ類($\phi=0.218$)に多く、野菜類($\phi=0.245$)では少なかった。